Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 成員カテゴリー化の観点から見た社会的相互行為の諸相 : 多人数会話における話者交替を中心に |
| Author(s) | 森本, 郁代 |
| Citation | 大阪大学, 2004, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/45766 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【5】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 森（もり）　本（もと）　郁（いく）　代（よ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（言語文化学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　１８９５９　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 16 年 6 月 28 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当<br>言語文化研究科言語文化学専攻 |
| 学　位　論　文　名 | **成員カテゴリー化の観点から見た社会的相互行為の諸相－多人数会話における話者交替を中心に－** |
| 論　文　審　査　委　員 | （主査）<br>教　授　西口　光一<br>（副査）<br>教　授　津田　　葵　　助教授　山下　　仁 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

本研究の目的は、日常会話という社会的相互行為の遂行において、参与者がその都度「何者として」参与しているかを明らかにすることにより、会話が組織化される仕組みを会話の不変的（invariant）側面と個別的側面の両方から記述・定式化することである。この「何者として」という側面は、従来、参与者の固定的な属性（年齢、性別、階級など）と同一視されることが多かった。しかし、本研究は、これを発話ごとに更新され変化しうる動的な参与者のカテゴリーとして捉えるべきだと考える。このような特性を持つカテゴリー化のメカニズムとして、Sacks（1972a, b；1992）により「成員カテゴリー化装置」が提唱されている。本研究では、会話分析の立場に依拠し、多人数による日常会話を対象に、どのような会話にも見られる話者交替という不変的な現象の記述と分析を通して、会話分析におけるコンテクスト概念の再検討を行なう。また、成員カテゴリー化装置を分析の観点として採用すると同時に、会話の参与者が会話を組織化するのに利用しているリソースでもあることを示す。

会話分析は、社会学の伝統の中ではじめて日常会話に焦点を当て、そこに人々が社会的相互行為を組織していくために利用するさまざまな規則や秩序が存在することを発見し、それらを記述・定式化してきた。その目的は、会話の参与者たちが互いの発話や行為の意味を理解し、次の自分の行為を適切に行なうために利用している手続きや方法を明らかにすることである。そのため、データを記述・分析する前に仮説を立てることを極力避け、会話中の参与者の志向を逃さず記述し、その志向の背景にある規則や秩序を見出すことを目指している。こうした方法論は、会話のコンテクストをどう捉えるかにも反映されている。Schegloff（1992）によると、会話のコンテクストは「会話外在的なコンテクスト」と「会話内在的なコンテクスト」とに区別される。前者は従来の社会学や人類学などが扱ってきた参与者の持つさまざまな属性（性別、年齢、階級、地域など）や会話が行われている状況（法廷、教室、インタヴューなど）を指すものとされ、後者は、会話内の発話と発話の連鎖組織や行為の連鎖を指すものとされる。そして、会話分析の目標は会話がどのような人数、参与者であっても「一時に一人が話す」「話者は繰り返し交替する」という不変的な側面がどのように形成されるのかを明らかにすることであるとして、分析上のコンテクストを後者の「会話内在的なコンテクスト」に限定し、前者の会話外在的なコンテクストを記述や分析に持ち込むことを厳しく制限する。

会話分析の知見は、会話が持つ不変的な側面がどのように生み出されるのかを明らかにした点で非常に有益である。しかし、会話ごとの個別性はなぜ生まれるのか、個別性は不変性とどのような関係にあるのかについては明らかにさ

れてこなかった。これに対し、本研究は、多人数会話における話者交替の分析を通して、日常会話においてもまた参与者がその都度自分や相手を「何者として」参与しあうかを成員カテゴリー化装置によって表示しており、さらにこの「何者として」という成員カテゴリーが話者交替システムにおける次話者決定のリソースとして利用されていることを示す。

具体的な分析内容と結果は以下の通りである。

(1)会話内において次の発話ないし行為として「いつ」「何を」行なうかを決定するために用いられているリソースは何か

日常会話は、話者交替や連鎖組織などの不変的な側面と会話ごとの個別的かつ動的な側面の両方を持つことで生み出される人々の社会的相互行為である。したがって、まず、会話の不変的な側面を生み出し維持するものとしての話者交替システム（turn-taking system）及び発話や行為の間の連鎖組織について、それらが会話内で「いつ」「何を」行なうかを決定するための手続きであることを述べた。そして、この手続きを円滑に実践するために、聞き手が現行話者のターンがいつ完了するかについての予測と、次ターンで行なうことが適切となる行為が何であるかについての予測を行なうことを可能にするようなさまざまなリソースが先行のターンや連鎖内に存在し、これらが次話者の開始するタイミングや次の行為として適切なものを投射していることを示した。さらに、従来個別に分析されてきた「いつ」についての投射と、次の行為として「何を」行なうのが適切かについての投射とがどのように関連しているのかを分析した。その結果、聞き手の応答が先行発話と隣接ペアを構成するものである場合は、先行発話が形態統語的な完了を迎えた時点で応答が開始される。これに対し、先行発話が情報伝達的な発話で応答との間に隣接ペアが成立しない場合は、先行発話が未完了な時点でも聞き手が応答を開始しうることを明らかにした。この結果は、聞き手が必ずしも先行発話が完了した時点まで待つわけではなく、先行発話がどのような性質のものであるかに応じて聞き手は自らの応答開始時点を決定していることを意味している。これにより、聞き手という存在を話し手によってターンを割り当てられる受動的な存在からより能動的な存在として位置付けることの必要性を示した。

(2)多人数会話における次話者として「誰が」「いつ」「何を」行なうかを決定するために用いられているリソースとは何か

多人数会話では「いつ」「何を」に加えて「誰が」次話者となるかを決定することが相互行為上の重要な課題であることを指摘し、聞き手の間のさまざまな参与上の地位の差が次話者決定において非常に重要であることを明らかにした。同時にこうした地位の差を生み出すものの一つである「現行話者の次話者選択のテクニック」に焦点を当てて分析を行なった。その結果、これまで会話分析が分析対象から排除してきたさまざまな会話外在的なコンテクストが利用されていることを明らかにした。次話者を選択する方法として「次話者に視線を向ける」というテクニックが最も一般的に用いられる。これは、その都度、各参与者が誰に視線を向けているかに影響を受けるため、これを補うさまざまなテクニックが利用されている。その一つであり最も確実である「名前で呼びかける」というテクニックは、聞き手の視線が確保できない場合や、次話者選択に失敗してやり直す場合など非常に限定された場面において、その都度の文脈と感応する形で利用されていた。また、相手との関係性に基づいて発話スタイルを変化させるという日本語の言語使用の特徴も次話者選択の方法として利用されていた。以上の多人数会話の分析から、現行話者による次話者選択テクニックの利用と実践において、その都度の会話内在的なコンテクストだけでなく、会話の状況や参与者の関係性、物理的な環境など会話外在的なコンテクストが参照されていることを明らかにした。さらに現行話者の発話によって関与的となった「語られている経験をした本人」といったカテゴリーにより、現行話者が選択した聞き手とは異なる聞き手が適切な次話者として発話している例をとりあげ、適切な次話者は「誰が」ではなく「何者として」という問題であることを明らかにした。加えて、この「何者として」という問題は、現行発話によって適切となる次の発話や行為の内容と不可分であることを明らかにした。以上の分析は、Sacks, Schegloff, and Jefferson（1974）が挙げた現行話者の次話者選択テクニックを拡張し詳細化するものである。同時に、多人数会話では、不変的なシステムである話者交替システムが会話外在的なコンテクストを参照することによってターンの配分が可能になっていること、特に、会話参与者が潜在的に持っているさまざまなカテゴリーが、その都度の発話が喚起する成員カテゴリー化装置を通して関与的になることで、次話者選択のリソースとして用いられていることを明らかにした。次に、先行発話の途中で聞き手がその発話と統語的に連続するような発話を開始する「引き取り」というふるまいに焦点をあ

て、多人数会話における次話者の自己選択においても、次話者が「何者として」ふるまうかが引き取りを適切に行なうためのリソースとなっていることを示した。また、特に先行話者の「共語り手」としてのカテゴリー化が、引き取り手としての適切さを生み出し、かつ逆に利用することによって、先行話者と反対の意見を強調したりジョークを言ったりするなど、参与者の個人的目的の達成に寄与していることを明らかにした。さらに、Sacks が構想した社会的役割や類型を指示するものとしての成員カテゴリーが「同じ経験をしたことがある者」や「語られている話の中の主人公」といった、社会的類型では捉えきれない多様なカテゴリーも包含し、それらが社会的類型と同様に会話の中でどのように関与的になるのかを示すメカニズムであることを指摘した。

成員カテゴリー化装置は、分析者がその会話の個別性を見出し記述する上での観点として有効であるだけでなく、参与者が発話や行為を行なうのに利用しているリソースでもある。そして、不変的な規則である話者交替システムや発話や行為の連鎖組織は、会話が行われている状況や成員カテゴリー化装置を通して関与的となる「何者として」発話するかという会話外在的なコンテクストに感応しこれを参照することによって作動するという関係にある。本研究が示した方向性は、会話が内包する動的で多様な社会的相互行為の諸相を捉えることを可能にするものであると考えられる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、多人数による日本語の日常会話における話者交替現象の分析を通して、会話が組織化される仕組みを会話の不変的側面と個別的側面から記述・定式化することの重要性と有効性を明らかするとともに、そのための方法論として会話分析の連鎖分析に成員カテゴリー化という観点を取り入れるというアプローチの提案を行うものである。具体的には、「多人数会話における次話者として『誰が』『いつ』『何を』行うかを決定するために用いられているリソースは何か」という問いを立て、日常会話の録画データをもとに詳細かつ緻密な分析を行っており、方法論上の議論をデータ分析に即して実証的に行っている。

本論文によって明らかになった特筆すべき知見は、多人数会話の分析において成員カテゴリー化の観点を導入することの必要性と意義をデータから明らかにしたことである。本論文では、話し手の発話によってそのつど喚起される各参与者の成員カテゴリーが次話者決定のリソースとして用いられていることをデータの分析に基づいて説得力のある形で実証している。従来のような参与者の属性に基づく会話の特徴付け（例えば日本人と外国人の会話といった特徴付け）が会話を静的かつ固定的に捉えがちであったのに対し、本論文が提案する成員カテゴリー化の観点は、会話が内包する動的で多様な相互行為の諸相を捉える観点として有効であることをデータ分析から明らかにしており、高く評価できる。

さらに、コンテクストに非依存のシステムであるとされる話者交替システムが、そのつどのコンテクストをどのように参照し、次話者決定を行っているのかという、これまでほとんど分析されてこなかった問題についてもデータの分析から実証的に検証している。多人数会話における次話者決定の問題は「誰が」ではなく「何者として」という問題設定が適切であるという主張は、以上のようなデータ分析と知見に基づくものであり、従来にない新しい視点を提供するものである。

一方で、「投射可能性」など本論文における主要な概念についての説明が十分に尽くされていない点がいくつか見られた。また、他の理論的枠組みや方法論との比較なども本論文での分析に基づいて議論を展開すべき余地があったとも見られる。しかしながら、このような問題点は、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上のように、本論文は、話者交代システムという会話の不変的側面とコンテクストという個別的側面の相互作用という、会話分析ではこれまでほとんど扱われてこなかった現象に注目し、それへの一つの可能な接近方法を実証的なデータの分析に基づいて提案しており、会話分析の分野において重要な寄与をなしうるものと考える。よって、審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位請求論文として十分価値があるものと判定した。